

市田柿の生産、販売活性化の一事例 「かぶちゃん農園」視察報告

望月 宏

長野県は、福島県と並び、二大干し柿生産県である。飯田市の柿の生産は江戸時代にまでさかのぼり、伊勢講と呼ばれる伊勢神宮参拝の際に、近隣の美濃より伝わったという説が有力である。市田柿の名称は既に大正 11 年に当時の市田村青年団により命名されていた。

今回社会科学研究所では、飯田市実態調査研究の最期の地として、市田柿の生産、流通、及び柿を軸とした「柿の里」作りを目指している、通称「かぶちゃん農園」を視察した。

かぶちゃん農園株式会社

住 所	本社 長野県飯田市川路 7592 番地 1
取 締 役	代表取締役 鏑木 武弥
設 立	2005 年 5 月 17 日
資 本 金	10,000 万円 (2013 年 7 月 31 日現在)
従業員数	29 名 (2013 年 7 月 31 日現在)

鏑木社長より、市田柿との出会い、生産、全国展開の過程、市田柿を通じた日本の伝統食品の現代的価値を見出したいとする思いをお伺いすることが出来た。

鏑木社長は東京の府中生まれ、大学では法律が専攻であり、農業ではなかった。学生時代、当時、有機農業は山形県高島町で先駆的に行われていたので、そこで農業体験を行い、共同体作りにも関わる農業の素晴らしさを感じ、就職も農業を志した。

農業関連の出版社に勤めた後、自ら海外青年協力隊でパラグアイに行き、有機農業の技術指導を行った。

その後自ら農業を始めるにあたり、2 年ほど日本全国を回り、多くの候補地から最終的に飯田市を選んだ。選定の最大の理由は、自然資本としてのきれいな水があることと、歴史に起因しているようだが、この地域はよそ者に対する受け入れる風土があると感じたことである。

10 年前に、5 反歩の土地を借りて営農を始め、販売方法としてその頃まだ目新しかった通販事業を行った。最初はいも、りんごなどを主として扱っており、市田柿については、ほとんど

知識もなく関心もなかった。

事実地元の人からは、この柿は地元では長い間保存食して利用されており、人様に売れるようなものではないと言われていた。しかし、通販の媒体のごく一部に小さく市田柿のことを掲載したところ、反応が良いことから、新聞広告を打つてみたら、2時間で完売してしまった。

その後 2、3年間かけて、詳しく市場調査をしたところ、柿には大きな潜在需要があることと、市田柿は、干し柿としてではなく、ドライフルーツとしての利用方が適していることが分かってきた。これを受けて市田柿を根本から見直し、生産、販売体制を新たに構築することになった。市田柿の本来の生産様式は農家が個別に行うのではなく、柿を吊るす時は、近隣住民と協力し、柿剥きは集落の人が集い行う共同作業であり、「結い」とも言うべき地域共同体の連携があることが特徴である。

生産面ではこうした共同体の状況を十分理解したうえで、「市田柿一万本プロジェクト」を立ち上げ、減少していた生産者をサポートするため、生産、衛生面などの品質管理面の問題に取り組んだ。

(なお、これに関連して柳田國男氏も、エッセイ『豆の葉と太陽』の中で、自宅の東京の成城の街の活性化を図るために、市田柿を住民の手で植えることを提案したことを史実として確認できた。ただし、成城での活動は実際は成功を見なかったようである。)

また、柿に含まれる未知の物を含む数多くのポリフェノールが存在すること、消毒剤としての柿渋を使い、ノロウイルスを根絶できることも確認された。

販売面では女性の需要が高かったことから、おしゃれなドライフルーツとして販売方法を考え直す中で、カタログ作成、パッケージングに女性のデザイナーを起用した。

現在 100 万人の通販会員に対して販売しているが、6 割は市田柿である。この他商品展開の一部として、サントリーと提携した市田柿をブランディーズ漬けもある。

文化活動として通販会員に対して、歌舞伎座の舞台への招待を行っているが、これは文化伝統を守る精神を、市田柿を軸とした消費販売活動を通して人に広めたいとの考えからである。そのためにも、市田柿のブランド化を推し進める必要があり、市田柿ブランド協議会ではこの地域ブランドを広めてゆくために、農産加工品にとどまっている市田柿を、食品としてとらえて、世界に通用する製品にするために質の向上をはかろうとしている。これは、2006 年（平成 18 年）には地域団体商標登録制度がスタートし、長野県で最初の地域ブランドとして認定を受けた

一方海外での柿生産について目を転ざると、中国、韓国が二大生産国である。特に韓国では 1000 年の歴史があることをブランド形成に利用し、冷凍技術を駆使して、夏の販売も可能にする体制を整えアメリカにも積極的に販売をかけている。こうした点は、市田柿の販売戦略と重

なるばかりでなく、日本の先を行っている。

この他、シルクドソレイユがカナダのケベックの貧困地帯から立ち上がり、世界に広がったことを知り、世界に向けて市田柿を発信するというコンセプトに刺激を受けた。また、カナダの特産品であるメープルシロップは単に商品だけではなく、観光と絡めている点に注目している。

このように、商品プラス観光で世界に向けて発信する、というコンセプトを海外の事例で知り、かぶちゃん農園の中に温泉、文化工芸館などを含む柿の郷づくりを進めている。折から、2017年には飯田市にリニア新幹線が止まることもあり、今後伝統的な食材に現代的な価値を与え、日本の食文化を広く広めるチャンスになることを期待している。

追記、東日本大震災以降、第2の経営の柱として、また地域にとっては電力供給のリスクマネジメントの一環として、太陽光発電事業を進めており、長野県内に10か所展開している。環境対策、及び磁場の林業活性化としては、バイオマスのペレットを温泉の湯を沸かす際に使っていることが挙げられる。

以上